アンリ・ベルクソンと井上円了

心霊主義をめぐって

鈴木由加里 *suzuki yukari*

1 「スピリチュアル」の現代的意味

現代社会において「スピリチュアル」とは、現代の科学では解明のできない不思議な精神事象などを形容する時に使われる言葉である。スピリチュアルな世界、精神世界や超心理学、心霊現象などは、テレビのバラエティ番組やその他のメディアによってとりあげられることが多い。それらは、科学的な知識をもった人々からすればいかがわしいものと考えられている。

一九世紀から二〇世紀にかけて、心霊主義や超心理学が誕生した時から、「スピリチュアル」なもの、精神世界の存在に関しては、熱心な「信者」と「懐疑的な人々」が存在していた。「スピリチュアルなもの」に対しては、現代科学を背景に懐疑的な態度をとることが常識的な対応とされてきた一方で、「スピリチュアルなもの」「精神世界」の現象への興味関心も持つ人々も多く存在している。

日本では、一九七〇年代には、盛んに「超能力」や「心霊現象」をテーマにした娯楽番組が作られており、八〇年代には、いわゆる「ニューエイジ」系の「スピリチュアル・ブーム」によって、瞑想や宇宙エネルギー、生命エネルギー等々の言葉とともに、現代科学の分析や現代社会において支配的な価値観を批判することが流行

し、一九九五年に地下鉄サリン事件を引き起こしたオウム真理教もこの流れの中に存在していたと考えられよう。

オウム真理教の事件は、「スピリチュアルを喧伝するカルト宗教」に対して社会的な警戒心を呼び起こしたものの、「精神世界」の重要性を説く自己啓発セミナーや勉強会が消え去ったわけでもなく、心霊研究家や心霊占い師がいなくなったわけではなかった。地下鉄サリン事件から十年たったころから、テレビ番組が「スピリチュアル」を売り物にするようになり(1)、現在も「スピリチュアル」なものについて、テレビをはじめ各種のメディアで取り上げられ続けている。

現代の日本社会では、それらはあくまでもサブカルチャーの領域に属するものとして、受け入れられている。それらは、「信じる」か「信じない」という態度決定を要求するようなたぐいのものとして語られてはいるのだが、その受け取り方は様々であり、大抵は懐疑的な態度を取りつつ、信じる人に対しては否定することはせず、多少はそういった文化現象に荷担するという距離感を保つことが常識となっている。

例えば、「前世」(生まれ変わり)や「守護霊」、「死後の世界」、「超能力」について、さもそれらが実在しており「真実」であるということについては、批判的ではあるが、マスメディアからもたらされる毎日の「占い」やパワースポット(2)とされている場所の写真を携帯電話の待ち受け画像に使うという程度の関わり方を自分に許すというような距離の取り方であれば常識の範囲ということである。

このように、日本語では、スピリチュアルという言葉は、精神世界に関するという程度の言葉として流通しており、スピリチュアリズムは、オカルト的な精神世界の思想、心霊主義という意味でしか使われていない。しかし、spiritualismという用語が意味するのはそれだけではない。哲学用語として使うならば、「唯心論」や「観念論」という意味である。どちらも「精神的なもの」を立脚点にしているのだが、形而上学的原理として「精神」

あるいは「イデア」を考えることと、霊界からの通信を聞くことができるということを真実として受け入れることには大きな違いがある。

現代では、真っ当な科学者や哲学者が、日本で使われているような一般的な意味でのスピリチュアリズム（心霊主義）に関与することは歓迎されておらず、むしろ批判することすら軽蔑の対象になる傾向がある。学問研究するものが、まともに向き合う必要のないサブカルチャーであるという認識が強い。アカデミズムと心霊主義の距離はとても遠いのである。

しかし、十九世紀から二〇世紀にかけての科学者や哲学者たちは、現代の学者たちよりも「心霊主義」により近いところで向き合っていた。なんらかのレスポンスを返さなくてはならない重要な文化的事象であったのである。

本稿では、このような十九世紀から二十世紀に、否応なく「心霊主義」と関わらざるを得なかった井上円了とアンリ・ベルクソンが「心霊主義」と向き合うことによって得られたものを検討しつつ、両者の類縁性も含めて論じていきたい。

2　心霊主義の系譜

心霊主義の歴史を語る資料が必ずとりあげるのが、「ハイズヴィルの心霊現象」とよばれるものである。一八四八年にアメリカのニューヨーク州ハイズヴィルのフォックス家の三姉妹が霊らしきものとの交信を行い、それが評判になり三人のうち二人の姉妹が霊媒師として各地で「降霊会」を開いていったのである。

彼女たちが開いた降霊会は興行的に大成功を収め、その影響はアメリカからヨーロッパに及んだ。彼女たちの降霊術は、四〇年間続き、「降霊術」や心霊術は社会的・文化的現象として欧米を中心に世界へと広まっていく

のである。フォックス家の姉妹たちは、その後一八八八年に自ら霊との交信はすべてトリックであったということを告白するが、そのころまでには、彼女たちに優るとも劣らない成功をおさめていた霊媒たちが数多く存在するようになっており、「心霊現象」自体を否定するまでにはいたらなかった。

むしろ、偽物の霊媒の存在は、本当の「心霊現象」が存在するであろうという前提を覆すよりは、何が本物で何が偽物であるのかという科学的な探求心をかき立てる結果になったのである。

霊媒の基本能力は、「霊界交信」（降霊術）「霊の物象化」「自動筆記」「透視」「自動筆記」「テレパシー」などである。霊媒たちは精神の特殊な能力を示す存在であり、霊と交信しその言葉を取り次ぐだけでなく、現実の存在する物理的な世界になんらかの影響を与える力をもっているとされていた。それは、霊の物体化であったり、何もないところから物を取り出して見せたり、物理的な力を加えず物を動かす念動力などである(3)。

心霊現象の研究としては、こういった能力がトリックではないかということを検証していくこ方向が考えられるのだが、フランスのアラン・カルデックは、「心霊主義」を「科学」として確立しようとした。

アラン・カルデック（Allan Kardec　1804-1869）は、本名をHippolyte Léon Denizard Rivailといい、ペスタロッチがスイスに開いた寄宿学校で教育をうけた教育者である。彼は、一八五五年にパリで「霊界通信」（降霊術）に参加した。それが「近代的スピリチュアリスム」の伝道者への出発点だったのである。

カルデックも最初から全面的に「霊界通信」（降霊術）を信じた訳ではない。何度も「降霊会」を試みた上で、それを「真実」として受け入れたのである。一八五七年にカルデックは、彼の守護霊から彼の前世は紀元前数世紀のフランスに生きたアラン・カルデックであることを教えられ、それ以後この名前を名乗り、霊界からもたらされる真理を次々と著作に表していくことになる(4)。

カルデックは、「心霊」に基づく哲学あるいは学問を示す言葉として、le spiritsme という用語を考えた。彼が目指したのは、降霊術自体を調査することではなく、降霊術でいかに霊界からの通信を正確に受け取るかということであった。霊界との通信を繰り返し、より多くの霊からのメッセージを記録できるように工夫がされた。

「ハイズヴィル」のフォックス姉妹の降霊会以来、霊が意志を伝えるのには、ラップ音を響かせ、それによってイエス・ノーで答えるか、アルファベットの順番を示す数だけ音を鳴らすという方法を使っていた。それが、「テーブル・ターニング」へとかわり、アルファベットを書いたウィジャボード（OuijaBoard）を使うようになる。

カルデックは、さらに進んで霊の指示に従って、霊媒が筆記用具を直接持つ「直接的サイコグラフィー」と呼ばれる方法によって、大量の霊界や霊についての情報を手に入れていた。カルデックからすれば、このような方法は極めて「科学的」なものであり、霊媒による筆記は霊による霊の存在証明としてみなしたのである(5)。

一九世末の欧米では、カルデックのように心霊主義を体系立てて整理し、それに対する信仰を示すようなグループがある一方で、「心霊現象」を科学的に研究する多くの研究学会が作られている。稲垣直樹によれば、その先駆的組織として、一八五四年六月にアメリカで設立された「心霊知識普及協会」Society for the Diffusion of Spiritual Knowledge が存在している。イギリスでは、元々ミルの『自由論』を討論するために作られた学術研究団体である「弁証法協会」Dialectical Society が、一八六九年、「心霊現象調査委員会」という下部組織を発足させ、著名な霊媒たちの検証をしたが、案に相違して心霊主義に肯定的な見解を持つ委員が続出することになった。

現在も存在しているイギリス心霊研究協会（Society for Psychical Research）は、一八八二年にロンドンで設立されたものだ。その目的は、科学が数多くの問題を解決すること可能にしてきた正確で冷静な探求の精神によっ

て、動物磁気や心霊、精神主義的といった用語で示されるような議論の余地のある様々な現象を研究することである(6)。初代会長は、ケンブリッジ大学の道徳哲学の教授ヘンリー・シジウィック（Henry Sidgwick 1838-1900）である。

イギリス心霊研究協会は、心霊現象を肯定する立場から研究を進めていた。その研究方法は事例を集め、実験をおこない、検証をするという実証科学の方法をとっている。その結果、多くの偽者、霊媒師たちのトリックを見破ることになった。

イギリス心霊研究協会は、当時でもまともに研究することがタブー視されていた、「心霊現象」を科学的に研究することを目的としており、そのために様々な分野の著名な科学者や哲学者を会員としてむかえ、国際的な学会であることをアピールしていった。歴代の会長には、アメリカの哲学者・心理学者であるウィリアム・ジェイムスや化学者・物理学者のウィリアム・クルックス、フランスの生理学者で一九一三年にノーベル賞を受賞したシャルル・リシェなど錚々たる学者たちが名前を連ねている。そして、一九一三年にこのイギリス心霊研究協会の会長に就任したのが、フランスの哲学者アンリ・ベルクソンである。

この時に行われた就任記念講演は、講演と雑誌発表記事をまとめた『精神のエネルギー』に収録されているが、ベルクソン研究においてはあまりとりあげられていない(7)。

次節では、この講演に見られるベルクソンの「心霊主義」への関わりをみていきたい。

3　ベルクソンと心霊主義

ベルクソンが、イギリス心霊研究協会での会長就任講演を行ったのは一九一三年五月のことである。この年の

ベルクソンは、初めてアメリカに赴き、コロンビア、プリンストン、ハーバードの各大学で連続講義するなど精力的に講演活動を行っている。

ベルクソンの講演は、「生きている人のまぼろしと心霊研究（"Fantômes de vivants" et "recherche psychique"）」(8)というタイトルで行われた。このタイトルの「生きている人のまぼろし」は、イギリス心霊研究協会が、一八八六年に出版した*Phantasms of Living*（『生者の幻影』）という二巻本を意識してのことだと考えられる。『生者の幻影』は、エドマンド・ガーニー、フレデリック・ウィリアム・ヘンリー・マイヤーズ、フランク・ポドモアによってまとめられた、「超常現象」の事例を集めた著作である。マイヤーズは、序文でこの研究の目的を以下のように述べている。

「…言葉を発せず、言葉を書かず、サインを示すこともなしに、ある人間の心が別の人の心に影響を与えたと考えられ得るあらゆる種類の事例にこの本では取り組むことを提案している。その事例とは、つまり既知の感覚の経路とは別の方法で影響を与えたと考えられる事例である。

このような思考あるいは感覚の伝達とは、我々が別のところで　テレパシー（telepathy）と名づけたものである。テレパシーの実在についての経験的な証拠の記録はこの著作の一部をなしている」(9)

この著作に集められた精神感応、つまりテレパシー（以下テレパシーで統一）のケースの多くは、死ぬ直前あるいは死に瀕した状態の人間が近親者もしくは親密な関係をもっていた人々のまえに姿を現すというものである。イギリス心霊研究協会は、そのような事例の聞き取り調査を行い、それがどの程度信憑性があるかということを検証したのである。別の場所に生きているはずの人の幻を見るということが、テレパシー能力によるものかどうかということを検証するのに、幻をみた時間と幻となって現れた人に実際に起ったことを日時も含めて検証す

ることがそのような経験の事実性を確定することになるかということについては疑問があるが、生者の幻覚についての言説を集めたフィールドワークとしてユニークなものである。

ベルクソンは、心霊研究に対して一定の距離を置いているが、このようなテレパシーの可能性について否定することはなかった(10)。むしろ、ベルクソンが「イギリス心霊研究会」と共有できたものが、「テレパシー」と呼ばれるものだったと思われる。

ベルクソンの哲学は、最終的には持続の一元論と呼ばれるような唯心論的な存在論に到達するのだが、そこに至るためには、哲学史における心身二元論の問題系を横切る論理と科学的な成果を踏まえて慎重に論を進めていくことを特徴としている。例えば、一八九八年の『物質と記憶』では、記憶及び認識についての心理学の理論と大脳生理学の成果を踏まえて、心身問題に取り組んでいる。一九〇七年の『想像的進化』においては、生物学と進化論をベルクソン哲学構築のための重要な論理として取り入れている。

このようなベルクソンの姿勢は、一九一三年の講演「生きている人のまぼろし」においても維持されており、「霊界からもたらされる高次元霊の箴言」を無条件に肯定するわけではない。ベルクソンの哲学で重要なのは、「自由」ということであり、霊言による決定論は受けいれられない。その意味でも通俗的な心霊主義＝スピリチュアリスムに与することはしないのである。

ベルクソンは、この講演の中で、『物質と記憶』において論じた記憶と知覚の枠組みを簡単に要約している。ベルクソンによれば、脳は記憶を蓄えておく器官ではなく、現実の生活に注意を向ける働きをするものである。例えば、脳に障害を負って記憶がなくなってしまったということがあっても、それは記憶が失われたのではなく、記憶を現在の生活に必要な形で引き出すための図式が壊れてしまったということになる。

知覚についても同様に説明することができる。人間は、実際に知覚しているものよりはるかに多くのものを潜在的に知覚しているのだが、生存のための行動、社会的な行動のために利益のないものは、遠ざけられているのである。実益のない知覚を遠ざける役割を果たしているのが、脳もその一部である「身体」である。私達は生きて生活している限り、限定された記憶と知覚を持ち続けることになるのである。

しかし、ベルクソンは、このような限定された知覚を生じさせている「生活への注意」が緩むこともあるということを仮定している。

「もしいくつかの無用な回想「夢のような」回想が生活に注意していない瞬間を利用して意識の中にすべりこむことに成功すると、わたしたちの正常な知覚のまわりに、たいてい無意識でありながら意識にはいることができて、ある例外的な場合や特別な傾向の人においては、実際に意識の中にはいって行く知覚のふちかざりができるのではないでしょうか。このような知覚があるとすれば、そちらは古典的な心理学だけでなく、「心霊研究」も取り扱うべき知覚でしょう(11)。」

「ある例外的な場合」とは、ベルクソンがとりあげているような夫の死を夢で知る妻、つまり近親者の死や心情的に強い結びつきをもった人々の死を夢にみるということだろう。「特別な傾向のある人」とは、霊媒師のような「超能力者」あるいはなにかの啓示を受ける「宗教者」宗教的英雄のような人たちと考えることができる。

ベルクソンによれば、人間の意識は、身体に結びついた限りにおいて空間的に隔てられるということになる。しかし、意識は身体の組織（脳）を超えて、広がりをもつものであり、心霊研究協会がテレパシーと呼ぶような意識の交流が存在していると考えられるとしている。このような意識の交流現象は、毎日の生活には酷く邪魔になるものなので、無意識のうちにおいやられており、それを抑制するメカニズムが巧く働かない時に、生きてい

る人の幻が現れるということが想定されるのである。このような幻やイメージについて研究するのが「心霊学」ということになる。

精神が身体を超えた存在性をもつということは、当然、身体の崩壊後も、その存在が維持されるという考えを導くことになる。

イギリス心霊研究協会における講演に先立つ、一九一三年に行われたコロンビア大学での“Spirituality and Liberty”と題された一連のレクチャーにおいて、ベルクソンは人間の不死性と死後生存の可能性について言及している(12)。しかし、このような死後生存の問題は、カルデックをはじめとする心霊主義者が語る霊の世界という想定に結びつくものではない。ベルクソンが提示しているのは、その存在の可能性である。心霊科学を新しい精神＝意識の探求の学と捉えて、その未知なる領域、テラ・インコグニタを探求するためには新たな探求のための方法が必要とされるとしているのである。

このような存在論的な意味をもつ広義の「意識」あるいは「精神」は、近代的な科学の方法論とは別の形で探求されなくてはならない領域であり、ベルクソンは、もし、近代科学が物質の方向を探求せずに心理学の方面に発達しならば、現在の心理学より更に進歩した心理学が誕生しただろうという想定を、この「生きている人のまぼろし」の中で述べている。

ベルクソンの哲学において、存在論的基礎をなしているのは「持続」であり、「生命」と同じ広がりを持つ「意識」である。この精神が身体を超えた存在性を持つという理論においては、心霊研究協会が提示するテレパシー現象の可能性を否定することはできない。

この講演が収載された講演集のタイトル『精神のエネルギー』がいみじくも示しているように、意識＝精神が

身体を超えてひろがりを持つ存在であることはベルクソン哲学の根幹をなすものなのである。生命と意識＝精神の一元的存在論は、心霊主義とある種の親和性を持たざるを得ないのである。

しかしながら、「生きている人のまぼろし」という講演において、ベルクソンは、心霊現象否定派に対しても肯定派に対しても、ベルクソンは満足を与えるような解答を与えていない。スピリチュアルな実在を絶対視することも、科学的な立場から否定してしまうこともベルクソンは周到に避けている。それは政治的態度というよりも、既存の哲学や科学で全てを解決しようとしない新しい学としての哲学のあり方から導き出される態度であろう(13)。

4　井上円了と心霊主義

イギリスの心霊研究会が日本に紹介されたのは、明治一八年（一八八五）のことである。箕作元八が「奇怪不思議ノ研究」において、イギリスの心霊研究について紹介した。井上円了は、これに先立つ明治一七年に不思議研究会を計画していたようである。

明治初期の学問の輸入時期に、当然欧米で流行していた心霊主義も日本に流入することになった。井上円了は、明治一九年に箕作元八を含む会員と不思議研究会を発足させた。この会には箕作元八をはじめとする新しい知識に敏感に反応した者達が会員として名を列ねることになったのである。不思議研究会自体は、目立った活動を行うことはなかった。この後、井上円了は哲学館での「妖怪学講義」を行うこととなる。

井上円了の「妖怪学」は、単にフォークロアとしての妖怪話を集めただけのものではない。不思議な話を広く集めながらも、当時の学問的な成果を踏まえつつ、それらの現象を逐一検証するものなのである。不思議研究会

から『妖怪学講義』『妖怪叢書』『妖怪百談』『おばけの正体』等々にいたる一連の研究は、このような諸科学の成果を踏まえた実証的な精神をもってなされたのである(14)。

つまり、井上円了の「妖怪学」は、科学的合理主義に基づいて、「妖怪」を批判検討することを指す。当時の日本社会における不可思議なものを無批判に信じる迷妄を取り払うために「妖怪学」を展開したのである。井上円了の教育理念、すなわち哲学や科学的知識をアカデミズムに閉じ込めずに、民衆に対して開き、前近代的なとされている迷信や迷妄を取り払うということを「妖怪学」においても貫徹したのである。このような啓蒙的な意味では、井上円了の「妖怪学」は高く評価されているが、学問的業績としては一段低く考えられてきた。

『妖怪学講義』は、一般社会で受け入れられ人気を博した。一般人への啓蒙書や教科書は学問的価値が低いというアカデミズム特有の価値観からだけでなくお伽話や怪談話に出てくる「妖怪」をテーマにすえたということも一因となって、井上円了の業績においては余技的なものとされてきたのである(15)。

井上円了の「妖怪」は、一般に知られている狐狸妖怪、カッパや幽霊といったものだけを指すものではない。「妖怪」とは「不可思議」なもの全般を意味する。井上円了は、妖怪学関連の各著作において、その分類を明らかにし、自らの「妖怪概念」を明確にしている。

まず、井上円了は、「妖怪」を「虚怪」と「実怪」に分類する。そして、古今東西の文献に現れる不思議な現象や新聞雑誌などによって報告される具体的な妖怪談を分析するために、「虚怪」と「実怪」をさらに細かく分けて、「偽怪」「誤怪」「仮怪」「真怪」という概念を提示している。

「虚怪」とは、相手を貶めるために幽霊話や因縁話を流したり、吉兆をトリックによって演出するなどといった人為的なものを指す。「誤怪」は、見間違いによって、光線音声などを不思議と誤解することによって見える

ものである。

「実怪」は、「仮怪」と「真怪」からなり、「仮怪」はさらに二つに分類されて、心理的妖怪、物理的妖怪となる。物理的妖怪は原因のあるもので、科学の進歩によってその原因が特定されるものを言う。心理的妖怪は、精神の変調によっておこる幻視、幻聴の類を言う。

以下は、大正八年の『真怪』の第一項で説明された「妖怪」の分類である。

「この分類は、妖怪研究着手当時より今日まで自ら用いておる。まず第一の偽怪は、人がなにか目的あって故意につくりたる妖怪にして、第二の誤怪は、妖怪にあらざるものを偶然誤って妖怪と認めたるものなれば、二者ともに虚怪の部類で、妖怪の鑑札を請求する権利のないものである。つぎに第三の仮怪は、天地自然の通理にもとづきて起れる妖怪なれば、自然的妖怪と称してよい。また、物理学や心理学の道理に照らして研究すべきものなれば、科学的妖怪、または合理的妖怪と申して差し支えない。これに対すれば、虚怪の方は、通俗的妖怪または迷信的妖怪と呼んでよかろう。余がこの自然的妖怪を仮怪と名づけたわけは、その怪たるや、偽怪、誤怪に比すれば実怪であって、妖怪の価値あるものなれども、物理、心理等の科学に照らせば、天地自然の道理より起ることが分り、別段不思議とするほどのものでないから、仮の妖怪としなければならぬ。これに物怪と心怪とを分かち、すべて物理、化学、動物、植物等の物質的諸学によって研究する方を物怪と名づけ、心理学の研究に属する方を心怪と名づけ、物理的、心理的の二種を分かつことにしてある。第四の真怪は、実怪中の実怪にして、心理も物理もその力及ばず、人知以上にしてわれわれの知識に超絶せる妖怪なれば、超理的妖怪と名づけておく。もし、仮怪を科学的とすれば真怪は哲学的である。しかも、哲学には現象と絶対との別あれば、仮怪を実怪中の現象的妖怪と名づけ、真怪を実怪中の絶対的妖怪と名づけてもよかろうと思う。」(16)

井上円了は、「妖怪」の中でも「実怪」に分類される「真怪」の存在を疑ってはいない。真の「妖怪」すなわち「真怪」は、到達すべき実体であり、井上円了の哲学における存在論の基盤をなす重要な概念なのである。『真怪』の第一〇〇項において、「真怪」は存在しないのではないかと問われた井上円了は以下のように答えている。

「(答う)しからず。真怪もとより存するに相違ない。これより真怪を説明して聞かそう。宇宙間の諸現象を分かちて客観、主観、すなわち物心両界にするのが古来のきまりである。しかして、物界には物の規則あり、心界には心の規則あって、物の規則は物的科学によって精密に立証せられ、心の規則は心的科学によって詳細に論明せられ、また、その両界の関係は哲学によってこれまた明示せられておる。これらの諸説に照らせば、世間にて伝うる千妖百怪の疑団はことごとく氷釈瓦解して、青天白日となる。しかるに、さらに一歩を進め、その物自体はなにか、その心自体はなにかというに至っては、物的科学も心的科学も筆を投じ口を緘し、造化の妙、谷神の玄と冥想するのみである。これこそ真正の真怪にして、真の不可思議というものだ。もしまた、心を離れて物を認むるあたわず、物を離れて心を識るあたわず、二者相関の本源を究めんとするも、幽玄の深雲の中に入りて、一歩も進むことできず、知識もはねつけられ、道理も自滅してしまうに至り、結局、物心の差別が空寂に帰するようになる。その体を哲学上にては、仮に絶対とも無限とも名づけておくが、言亡慮絶の境にして、真怪中の真怪、不思議中の不思議とせざるを得ぬこととなる。また、時間の限りなきを探り、空間の際なきを究むるも、やはりこの玄境に達するようになる。これが正統の真怪である。」(17)

ここで明言しているように、井上円了は、単に妖怪の存在自体を否定することを目的で「妖怪学」を構築したのではない。むしろ、「真怪」の存在を前提として、それを示すような諸現象に至り、「真怪」とは何かというこ

とを理解することを目的としている。「真怪」とは、唯心論的立場をとる井上円了の哲学において存在論的基盤となる概念なのである。真の不思議とはこの「真怪」から発するものであり、それを探求するのが井上円了の哲学的目的である。

『真怪』は、広く一般的に新聞や雑報の類にとりあげられる同時代の不思議の数々を分析し、真の妖怪すなわち「真怪」か否かという判定を行うというスタイルの著作である。この中に取り上げられている不思議な現象の中に、イギリス心霊研究協会が収集したテレパシーの例、死に瀕した人がその死を知らせるという現象もいくつか取り上げられている。

例えば、「第六六項　遠距離の間に不意の出来事と死との符号談」(18)、「第六九項　幽霊の寺参りの実験談」(19)等、第六〇項目以降には幽霊による死の告知、透視眼、読心術、千里眼、念写、「精神の力で物品を動かす実例」（念動力）などの心霊主義でとりあつかわれている事例を井上円了も俎上に載せたのだった。

また、第七四項と第七六項、第七七項で、乃木大将の幽霊談をとりあげているのだが、それらについてことごとく妄想幻覚の類としている。乃木大将の事例とは、明治四三年に報知新聞に掲載されたもので、日露戦争の時に戦死した次男の幽霊が、乃木大将の営所に会いに来たという話である。この話は当時広く知られていたものだった。乃木大将は、戦場の事情を把握しており、息子が戦死することを予想可能であり、自ら息子の姿という幻影を作りだしていたのだ、というのが井上円了の解釈である。

それに対して「第九五項　四歳の小児の感応談」においては、テレパシーの可能性についていささか詳しく論じている。

この話は、高知市に住む河野某氏が老父をおいて、十余里はなれた郡役所に赴任していたところ、そこで生ま

れた子供、老父とは一度も会ったことのない子供が、老父が亡くなった時間に大声をあげて祖父がなくなったことを告げたというものである。このケースは、幽霊の姿を見たわけでもなく、直接に知っている人でもない人の死を知り得たということである。「第七四項　乃木大将の幽霊談」でとりあげられている戦場で戦死した息子の幻を見た乃木大将のケースのように、すでに知っている情報から想像可能なことを夢に見たのだろうという説明がこのケースの場合は成り立たないのである。

それ故、井上円了は、別の仮説として以下のように述べている。

「世間のいわゆる無線電信の電気は物質性電気である。われわれの精神は物質性ではない。しからば、精神は電気のごとしといっても、精神電気と物質性電気を別にして取り扱わねばならぬと思う。余はこれを、仮に物電と心電と名づけておく。すでに物電すら遠方へ感伝することができるならば、心電はむろん感伝すべきである。しかもその感伝は、物電のごとく親疎の別なく、一般にあまねく感伝するわけであるが、ただこれを感受する人の方にて、感知し得ると得ぬとがある。あるいは親子とか、あるいは兄弟とか、すべて血縁あるものは、身体も精神も同一の遺伝性を有しておる。

換言すれば、心身ともに同一の質分を備えておる。そこで、心電が通じて来ても、他の人には感知せずして、質分を同じくせる親戚に限りて感知することが起こる。また、親戚間は顕識、潜識を通じて、各自の意向が常に待期し、互いに引き合っておる。」(20)

井上円了は、人間間で感知可能な精神性電気という精神の力、つまりテレパシー仮説を想定しているのである。心電は、誰もが感知可能であるが、感知するのに最適な状態にない場合には、全く感知できないものとされており、高知市の事例で、四歳小児のみが祖父の死を感知し得たのは、他の人々は感知するのにふさわしい状態

になかったということになるのである。井上円了は、この「心電説」＝テレパシー説という仮説が成立するのであれば、このような現象は「準真怪」でしかないとしている。

この井上円了のテレパシー仮説は、近親者に自らの死を伝える幽霊説を批判することにも使われている。自らの死を知らせるために、霊魂が生前の姿のまま近親者に会いに来るということは、乃木将軍の事例に見られたように井上円了は徹底的に自らが作りだした幻想という説で否定している。巷で幽霊とされるものは、心電によって喚起されたものであっても、「幻影はこれを見たものの精神的作用で、主観的産物である。しかして、心内よりこの幻影を起こさしめた真因は、先方より伝え来たれる心電であると解釈しなければならぬ。」(21)

心電説については、仮説としているのだが、ベルクソンが想定するようなテレパシーの可能性を井上円了も想定しているということは興味深い。常に心電なるものが他者の意識に働きかけることが可能であるとするのではなく、感知するにはふさわしい状態が必要であるということも、ベルクソンのテレパシー論と類似している点である。どのような状態であるならば感知可能なのかということについて、この著作においては詳述されていない。心電を感知しさらには「真怪」の実相に至るための方法について井上円了がいかに構想していたのか、ということについてはさらなる研究が必要であるが、その点については別の機会に論じていきたい。

5　井上円了とベルクソンの類縁性について

井上円了とベルクソンの生年は、それぞれ一八五八年と一八五九年であり、ほぼ同時代を生きた哲学者として考えることができる。それゆえ洋の東西の違いはありこそすれ、社会精神史的な問題設定を共有していたと言えるだろう。ちなみに、本稿でとりあげたベルクソンの『精神のエネルギー』と井上円了の『真怪』は、同じ

一九一九年に出版されている。

両者の心霊主義に対する対応は、一見すると正反対のように思われる。ベルクソンは、イギリス心霊研究協会の会長を務め、心霊研究に対しては、ベルクソンの解釈内の心霊研究についてではあるが、その存在価値を認めている。特に、ベルクソンの哲学的立場から導き出されるテレパシーの可能性については、先に論じてきた通りである。

一方、井上円了は、心霊主義のオカルティズムを徹底的に批判している。特に、「テーブル・ターニング」の降霊術の日本的受容としての「コックリ」批判は有名であり、著作『真怪』では、降霊会や念写、千里眼、念動力等々の心霊主義の現象はことごとくその存在を否定するのである。井上円了におけるこのような「妖怪」批判は、「真怪」に至るための重要なプロセスと考えることができる。「虚怪」や「仮怪」を見分け、この「妖怪」を検討することで、「真怪」に近づいていくということが目的なのであって、批判のための批判ではないのである。それ故、四歳児が会ったこともない遠く離れた祖父の死を感得するような事例にしても、わざわざ説明の仮説として心電＝テレパシーを想定して分析をしていくのである。

井上円了とベルクソンが、心霊現象に分類されるテレパシーの可能性の受容について類縁性があるのは、両者の哲学が唯心論的な存在論に立脚しているからだと考えられる。その存在論とは、心霊主義に見られるような心霊（spirit）が物理的世界の法則を無視するような力を発揮することを認め、霊的な存在が物理的世界に実体を伴って現れるということを認めるものではない。

両者が想定している心霊的なものは、いわゆる心霊主義の霊界ではないのである。人間存在のもつ精神性、それは哲学における物心二元論の検討から導き出されるのだが、両者ともに唯物論的思考との対立によって、精神

的なものの存在論的優位を論証していくのである。

井上円了においては、「真怪」こそ実在であり、世界そのものであり、その存在論の根幹をなすものである。「真怪」とはものそのもの、新なる実在であって、それ故にその不可思議さは体得することの難しいものである。ベルクソンの場合は、「持続」「生命」の存在論とそれを感得する直観の論理をその哲学の特徴とする。

両者は精神的なものの実在性、井上円了の言葉でいえば「霊魂」の存在を前提としていたため、いわゆる心霊主義とベルクソンあるいは井上円了のような唯心論的立場が混同される場合もある。

また、両者に共通する知的枠組みとして、進化論を忘れてはならないだろう。ベルクソンにおいては、物質である脳と記憶と知覚の問題を当時の科学的理論を検討することによって、その物質性とは性質を異にする「意識」あるいは「精神」のひろがり＝生命にたどり着く。そして、それはベルクソン的なヴィタリスムを展開することになる『創造的進化』へと結実していく。

井上円了もまた進化論について以下のように言及している。

「前述の道理が唯物論者に分り兼ぬるのは、彼は平素を以て死物即ち無生物の一塊と信ずるからである。依て宇宙の活物たり霊体たる所以を説き示すことが肝要ならんと考へます。偖て唯物論者も此宇宙が進化して此世界を現じたることは定めて疑いますまい。然るに進化は他より「ゴット」の如き怪物が来たりて促したるではなく、宇宙自ら、その身体に固有せる大勢力によりて活動したるものである。換言すれば、自活自動の開発であることも必ず承知でありましょう。果たしてしからば、これを活物と名づけずしてなんと称するでありましょう。」(22)

これは、『霊魂不滅論』の「第十三回　世界は活物霊体なる事」での宇宙の説明である。井上円了によれば、

宇宙は自動自発の活物霊体なのである。宇宙そのものである「真怪」もまた活物霊体ということになるのか否かは検討の余地があろうが、ここで注目すべきなのは、宇宙は自らの力で進化し続ける霊体であり、宇宙自体の活力によって進化するというヴィタリスムが井上円了の哲学に存在していることであろう。

『霊魂不滅論』でも、それまでの著作と同様に心霊主義で扱われるような死後生存説、霊魂実在論を否定しながらも、「活物霊体」の実在性を主張していくのである。このような唯心論的立場に基づく、精神の力の想定はベルクソンの哲学と重なってくる。

井上円了とベルクソンに限らず、この時代の自然科学者も含めた思想家たちは、心霊主義、実証的近代科学の成果、進化論と宗教的なものとの関係について、対決することを求められていた。

ベルクソンと井上円了はそれぞれ異なった方法でそれらと対峙し、スピリチュアルな実在を形而上学的基盤におきつつ、精神的なものと物質的世界との相関の中に踏みとどまりながら、人間の向かうべき道を示唆する新たな哲学のあり方を模索したのである。

【註】

(1) テレビ朝日による「国分太一・美輪明宏・江原啓之のオーラの泉」の放送開始は二〇〇五年四月四日。二〇〇九年三月一四日にレギュラー放送は終了。この番組は、スピリチュアルトーク番組として、「スピリチュアル・カウンセラー」の江原啓之がゲストの「オーラ」「前世」「守護霊」などについて話すものである。番組サイトには、それらは科学的に証明されたものではなく、人生におけるヒントになるものだという趣旨の文言があった。

(2) 精神的オカルト的なエネルギーを発しているとされる特定の場所のことを言う。そこに行くことで、自分のエネルギーを取り込むことができると考えられている。神社仏閣、遺跡などが多くパワースポットとされている。

(3) 三浦清宏著『近代スピリチュアリズムの歴史　心霊研究から超心理学へ』講談社　二〇〇八年　二二〇頁

「スピリチュアリズム再考⑤―研究の対象となる心霊現象」を参照。

（4）Kardec、Allan　*Les Livre des esprits,contenant les principes de la doctrine spirite philosophie spiritualiste*（1éd.:1857）librairie des sciences psychologiques（35 éd.）1889　カルデックの著作については、フランス国立図書館が提供するPDFファイル版を利用した。

この著作は、日本でも『霊の書』のタイトルで翻訳されている。『霊の書』上下　桑原 啓善訳　一九八六年　潮出版

カルデックの著作では、霊の転生説、人間の世界を霊の試練の場と考える、より上級の霊からもたされる言葉を人生の真理を示す哲学が語られている。これらは、スピリチュアル系新宗教によくある教義と親和性をもつものである。

（5）カルデックの評価については、稲垣直樹『フランス〈心霊科学〉考　宗教と科学のフロンティア』人文書院　二〇〇七年を参照。

（6）イギリス心霊研究協会（Society for Psychical Research）のHP内に掲載されている会の歴史や紹介資料を参考にした。http://www.spr.ac.uk/main/（二〇一〇年七月二五日）閲覧

（7）この点については、藤田尚志「唯心論（スピリチュアリスム）と心霊論（スピリティスム）―ベルクソン哲学における催眠・テレパシー・心霊研究」『フランス語フランス文学研究』日本フランス語フランス文学会／日本フランス語フランス文学会 編 vol.91 2007 pp.168-183 を参照のこと。

（8）ベルクソンの著作からの引用頁は、Bergson,H.,*Œuvres de centenaire*, Paris, PUF, 4e ed. 1984. *Mélanges*, Paris,PUF,1972. による。

各著作については、以下の略記号を用いる。

E.S.　Énergie spilituelle,1919.

M.R　Les deux sources de la morale et la religion,1932.

M.　M élanges, 1972.

（9）*Phantasms of Living* vol.1 1986 Edmund Gurney, Frederic W.H.Myers, Frank Podmore, London : Rooms of Society for Psychical Research p.xxxv　引用部分は拙訳による。

（10）一九〇一年の心理学研究所での講演「夢」においては、心霊研究がもたらす成果への価値をおきながら、自分はあえてそのような領域に思い切って踏み込むことはないだろうということを述べている。E.S p.896

(11) E.S, 874p.

(12) この講演については、英文による要約しか残されていないが、六番目の講演において人間の不死性は証明されていないが、死後も生存する可能性があることをとりあげている。M.988p.

(13) ベルクソンが、再び「心霊研究」について言及するのは、一九三二年に出版された『道徳と宗教の二源泉』の末尾においてである。

「要約すれば、我々の脳は我々の表象を生み出すものでも保存するものでもない、我々の表象が活動的になるように単にそれを限定するだけなのである。それは生命への注意の器官なのだ。しかし、その結果、身体の中あるいは身体が限定している意識の中に、その性質上、人間のactionから免れている対象を人間の知覚から遠ざけることをその機能とする特殊な装置が存在しているにちがいないということになる。もしこのような装置の調子が狂うならば、それらによって閉じられていた扉が開く、そして、おそらく彼岸（au-delà）であるような外部（en dehors）から何ものかが入ってくる。「心霊科学」が引き受けているのは、このような異常な知覚なのである」D.S. p.1243

ここでのベルクソンは、一九一三年の講演の内容から一歩踏み込み「彼岸」の存在の可能性へも言及している。ベルクソンが宗教と道徳を扱った最後の大著において、到達した彼岸（au-delà）についてはさらなる検討が必要である。

(14) 井上円了の不思議なものへの興味は、幼少期から存在しており、それが一連の「妖怪学」関連の著作や講演につながっている。この点については、三浦節夫　解説「井上円了と妖怪学の誕生」『井上円了選集　第二一巻』東洋大学井上円了記念学術センター　二〇〇〇年　四六四－四九三頁　参照。

(15)『井上円了選集　第二十一巻』東洋大学井上円了記念学術センター編集　東洋大学　二〇〇一年　に収載されている。三浦節夫の「解説―井上円了と妖怪学の誕生」を参照。三浦節夫は、井上哲治郎と三宅雪嶺の追悼文をあげて、「妖怪学」への評価が学問的に取り上げられることがなかったことを指摘している。

「それからだれも知っているとおりに、博士はよほど妖怪のことを研究されて、『妖怪学講義』というものを発行された。ところが、よほど広く世間に喝采を博した。この書には、妖怪などは迷信であると言って、妖怪を撲滅することに力を尽くされた。しかしながら、世には不思議なことを好む者が多く、田舎ではよほど興味をもってこれを歓迎したようである」（四六五頁）

この井上哲次郎の追悼文には、哲学者が、一般大衆が興味を示すような「妖怪」や「不可思議なもの」へ真面目に

取り組むことへの批判的な眼差しが含まれているように思われる。このようなアカデミズム側の態度は、現代の研究者たちにも共有されている。

(16)『真怪』『井上円了選集　第二〇巻』東洋大学井上円了記念学術センター　二〇〇〇年　三四九－三五〇頁
(17)同書　五〇七－五〇八頁
(18)同書　四五七頁
(19)同書　四六〇頁
(20)同書　五〇〇－五〇一頁
(21)同書　五〇四頁
(22)『霊魂不滅論』『井上円了選集　第一九巻』東洋大学井上円了記念学術センター　二〇〇〇年　三二四頁